

おとな世代の家族の世話を介護などを担う「ヤングケアラー」について厚生労働省が4月、小学校6年生を対象とした初の調査結果を公表しました。回答した約59人のうち約1・5%が「家族の世話をしている」と答えました。約15人に1人です。ケアを始めた年齢は10～12歳が40・4%、7～9歳が30・9%で6歳以前からは17・3%いました。早くから家族のケアに携わるケースが少くない実態が浮き彫りになりました。

つむぎ自覚できぬ可能性

ヤングケアラーは「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどをを行っている12歳

主張

ヤングケアラー

未満の子ども」(日本ケアラー連盟) とされます。年齢や成長の度合に応じて責任を負わされ、生活や学業に困難をきたす子どもへの支援は重要な課題です。

調査によれば、ケアを必要とする家族は「あそだ」が71.0%と最も多く、次いで「母親」の19・

孤立させない支援を強めよう

8%でした。内訳は「洗せり」40・4%、「食事の準備や掃除・洗濯」35・2%、「きよだいのお世話」28・5%などです。頻度は「毎日」が52・0%でした。次いで「週に1回」が41・1%、「月に1回」が16・8%、「月に数回」が6・5%、「月に1回未満」が4・4%でした。

しかし、「特に苦しさを感じていない」との答えは半数にのぼりました。7時間以上ケアをしてしまった中でも、3割超が「むしり大変さを感じていない」と回答しました。家族へのケアが常態化し、大変さを十分に自覚できないない可能性を示唆しています。

の面も断せられてしまう。「問題提起をほめたらせし」というか如実な訴えもあるのか。

は「家庭内の問題」とみなされる風潮です。医療・介護・福祉行政の大幅後退が、家庭に責任を負わせる流れに拍車をかけています。岸田文雄政権・与党には「家庭」を過度に強調する傾向が顕著です。「血の責任」論で子どもを通り詰めのいじめ話されません。

い務つた。かくして壁面が壁紙で
仕切られたので、廊下や昇降場所が
えてこます。「壁紙は壁にしてお
う」「窓枠ができてこな」「襖の物
を出すのが遅れる」など、うけつけ
である人がじない子の紹介でこ
た。学校生活に支障が出てこない
ことが改めて確認されればいい。

ケア時間が長い子など、一家族の「JUG」を超したくなったり、「相談しても何も変わらない」という感覚が高まってしまった。困難を抱え込み、孤立を深めながら繰り返します。誰かお手伝いするのを要望では、「特にない」と答えた50・60歳の方で、「自由な接觸時間がほしい」と、15・23歳、

めに苦悶の聲を果たすのです。
苦しめる「家庭」の強調

卷之三